

グループインタビュー「障害者」まとめ

現況・課題

提案

生活のしにくさ

外出

- ・自転車がこわい
- ・障害者専用スペースに一般車両が駐車
- ・点字ブロックが多く車いすで移動しづらい。なにかよい工夫はないか。
- ・歩道がせまく車道に向かって傾斜だらけ
- ・商店の看板が点字ブロックの上に乗っている
- ・信号がない横断歩道は一人では渡れない
- ・歩行中に途中で人や物にぶつかったりすると方向がわからなくなる
- ・車いす「専用トイレ」から「優先トイレ」になり、一般の人が使ってしまって使えないと
- ・スロープを使うバスは運転手の労力がかかるし、乗客にも時間のロスがある。
- ・段差を乗り越えないと入れない商店がある

ハード面はお金をかけなければ何とでもなる

意識のバリアフリー

- ・アパートを借りたい、どこかにいきたい、がうまくいかない
- ・今まで障害者を別枠で捉えていた人たちは、いきなり「一緒にまちで暮らそう」と言われても、その心の中に入り込むことは難しい
- ・箱物をたくさんつくって障害者をそこに入れればよいという考え方方がこわい
- ・生活の場所が限られる。地域の人がそれを当然と思うことがこわい

教育の問題

障害児の塾

ふつうの子どもや軽度障害児の塾はあるのに障害が重いと受け入れてくれず断られたので自分達でつくった

学校教育

- ・健常者と障害者が別れて育つことの問題
- ・養護学校と中学校の交流
- ・障害児教育プラン なんの対策もなしに普通級では対応できない
- ・障害だといじめられることも
- ・学校を出た後の長い時間の共生 一般級にいくといじめられると保護者が思う。しかし、学校を出た後の長い生活のほうが大事
- ・お母さんややさしい先生のそばで保護されると、社会のルールやと共に生きていくにはどうしたらいいのかということを考えられない

福祉教育

- ・学校・行政の福祉教育活動により、理解してもらえるようになった
- ・授業の中だけで福祉教育を教えようとしている。理解だけではなく地域の中での生活・取り組みを教えて欲しい
- ・小さい学年から大きい学年まで発達段階に応じて学校全体の取り組みになって欲しい。授業にでてきた時だけ勉強するのはおかしい
- ・視覚障害者の困難さの認識。実際にアイマスクなどつけて歩行体験をしてみて

支えてくれる人

- ・ボランティア
- ・市の職員
- ・ヘルパーさん
- ・通訳
- ・手話 (ふれあいサークルかめ)

- ・保健師
- ・町内会
- ・近所の人

ふつうにつきあう
ボランティアに連れて行ってもらうのではなく、やあいこうよといふともだちがほしい

ともだち

情報

情報をまとめるプラットホームの必要性を感じている

- ・区外とのつながり
- ・他の会ともつながりたい
- ・東京都の保健所の対応は良い
- ・療育センターに近所に同じ障害がある人がいないか聞いてもプライバシーの問題といって教えてくれなかった

自転車

杖を持っている人がいたら減速し、一旦停止をし、注意して通行！

バスに乗ることがひとつのアピール

トイレ

「車いすの方が来たらおゆすりください」とひとこと書いておくなどの情報が必要

店

- ・公共施設や一般的な店舗の入口に音声誘導装置の設置
- ・店側が誰もが使いやすい店作りの発想を持つためにはまちづくりのPRをしていく必要がある
- ・障害者への接客教育システムづくり

地域とどう関わりたいか

- ・障害者である前に市民である。障害について自ら理解を求めていく必要がある
- ・手話を広げたい
- ・障害者が対等に意見を言える場をもっと
- ・あそこで生活しているんだということを地域でわかってほしい。ともに暮らしているという形で把握してほしい。
- ・自治会役員や民生委員などには障害のあることを把握してもらいたい
- ・近くの人に理解してもらう 声をかけ合う関係づくり 外にでる！交流する！
- ・同じ障害がある子と交流をしたい

点や線ではなくて面での普通の生活

障害者と地域が融合する

身内で本人を守るというバリアで10年前は障害者を家から出せないという状況だった。このバリアを乗り越える

学校教育に求めたい目標

基本的には共生していくこと、地域の中で障害者と健常者が共に暮らすこと

各教室に教員が行って対応するデリバリー形式にしたら。子どもを教室から取り出すのではなく、大人が赴くように。教員が横に付くことで落ち着く子もいるのでは

どんな地域になれば（万が一の時に）

- ・事務局が障害者の居住地等を把握し緊急連絡先を決める。3団体をもっと広げ、全ての障害者の把握。障害の重さで要望が異なる事の理解。
- ・地域の民生委員、自治会の方にも幅広く把握してもらう
- ・プライバシーの問題はあるが、団体或いは自主的に消防署登録をしている。個人が自ら申請できるような機会があればよい
- ・急な入院等の場合の連絡手段。(近所、ヘルパーさん)
- ・町内の避難訓練への参加を。そういうことの出来る町内のつき合いが必要
- ・災害時の避難の時に目で見てわかる目印があると聴覚障害者には便利。(旗・光る棒)
- ・地震など緊急に連絡ほしい時にFAXで警報を流すなど地震の時に聴覚障害者に知らせる仕組みがほしい

普通の友達がいて当たり前に
めげないで、障害者も対等な立場で
積極的に話かけていくことが大切

情報の発信地の一元化

ここに行けばわかる、こういう手続があるという
情報の発信があるといい

計画への提言

- ・障害者を同じ仲間だと位置付ける基本的な考え方を計画に入れてほしい
- ・この会議に出られない重度の人・24時間介護の人もいるが福祉の利用者である。何かのかたちで出向いて聞き取りが必要